

センターだより

第44号

平成29年3月17日 発行

Aomori Prefectural School Education Center
青森県総合学校教育センター
〒030-0123 青森市大字大矢沢字野田80-2
☎017-764-1997 FAX017-728-6351

お礼の言葉

『パルティード・ア・パルティード』

～「生きる力」を育むため、一つ一つ実践を積み重ねる～

今から15年ほど前、教育行政の仕事に携わる中で、本県の学校教育が目指すべき方向性について、教職経験10年の先生方を対象にアンケート調査を行う機会がありました。その中で、「子供たちに必要な資質や能力」という問いに対して、小学校では、「自ら課題を見つけ、自分で考えて行動していける力」や「学んだことを生活に生かす力」、「他者との人間関係をつくる力」、中学校では、「集団の中で問題を解決していく力」や「必要な情報を選択し、解決する力」、「物事を客観的に見る力」などの回答が見られました。今も変わらない教育課題の存在とともに、子供たちの「生きる力」を育むため、一つ一つ実践を積み重ねている先生方のご苦労が感じられます。

話は変わりますが、新年早々、教育における日々の取組の大切さを改めて考えさせられる言葉と出会いました。第95回全国高校サッカー選手権大会で優勝した青森山田高校の住永翔主将が開会式の選手宣誓で述べた言葉です。「パルティード・ア・パルティード」スペインリーグ、アトレティコ・マドリードのディエゴ・シメオネ監督が常套句として用いるものですが、直訳すると「一試合、一試合」という意味です。住永翔主将は、一試合、一試合、目の前の試合に勝利した者のみに次の試合があると述べ、常にこの気持ちで試合に臨んで来たと言いました。ディエゴ・シメオネは、強豪チームがひしめくスペインリーグにおいて、一つ一つの積み重ねが勝利を導き、ひいてはリーグ優勝につながることを、選手たちに唱え続けている人物です。

私は、教員として駆け出しの頃、サッカー部の監督を10年ほど務めました。サッカーの試合では、選手一人一人が次の展開を予測し、創造力を働かせながら、仲間と共に主体的にプレーすることが求められます。連戦

の中で粘り強く勝ち進むチームに共通するのは、練習で培われた基礎・基本と、それを試合の中で活用する力、新たな課題に直面した時に考え、判断し、表現する力が選手一人一人に備わっていることです。サッカーにおける選手の資質・能力と、学校現場における教育のあり方を比較することは、いささか無理があるかも知れませんが、変化の激しい社会の中で、生きて働く「知識・技能」の習得や、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力」など、次期学習指導要領が育成を目指す子供たちの資質・能力と重なるものがあります。

言うまでもなく、こうした資質・能力を育むためには、教育に携わる私たちが、時代の変化や社会の動向に目を向けつつ、子供たちの学ぶ意欲を喚起する創意工夫にあふれた教育活動を展開することが大切です。これまでの指導方法を振り返り、教育課題の解決に向けて日々の実践を積み重ねる姿勢、一人で取り組まず、仲間を信じて協働する姿勢、これもまた、「パルティード・ア・パルティード」という言葉に込められた思いであると考えています。

予測が難しいこれからの社会を生きる子供たちの教育において、教員の資質・能力の向上が問われる中、青森県総合学校教育センターでは、国や社会の動向等を踏まえながら、学校における教育課題の解決に向けて、研修講座の開催や研究活動に取り組んでおります。先生方におかれましては、多忙な毎日を送る中で、当センターの研修等にご参加いただいていることに感謝申し上げますとともに、子供たちの未来を共に創る教育活動の充実に向けて、今後とも、当センターを積極的にご活用くださるようお願い申し上げます。今年度のお礼の言葉に替えさせていただきます。

(県総合学校教育センター 副所長 中嶋 豊)

学校現場で活用できる研究成果をモットーに日々研究に励んでいます！

一年目研究員の研究紹介②

廣谷 陽輔研究員

(教育相談課 原籍校:弘前市立第三中学校)



研究主題

中学生の自尊感情を育むための指導の在り方

－「学級力向上プロジェクト」を生かした実践をとおして－

研究に向けて

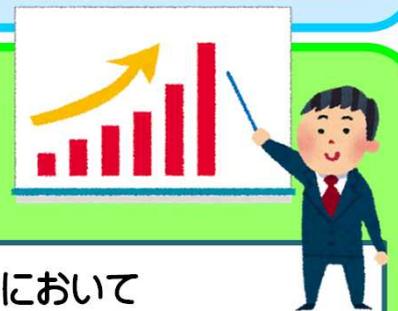
子供達が毎日生活する学級を、一人一人にとって居心地の良い場所にし、学校生活満足感を高めることで自尊感情を育むことができるのではないかと考えました。具体的な手立てとして「学級力向上プロジェクト」を取り上げ、プログラムを作成し、実践することを研究の柱としています。

研究内容

R-PDCAサイクルを取り入れた「学級力向上プロジェクト」に自尊感情を育むという目的を付加し、中学校の教育現場において、実践できるプログラムを作成します。このプログラムを実践することで、中学生の自尊感情を育むことができるか、効果を検証します。

山中 貴志研究員

(義務教育課 原籍校:東北町立東北中学校)



研究主題

中学校数学科第1学年「資料の活用」領域の指導において資料の傾向をとらえ説明する力を育成する指導法の研究

－ 批判的思考のプロセスを取り入れた活動をとおして－

研究に向けて

中学校数学科「資料の活用」領域では、全国学力・学習状況調査や青森県学習状況調査から、「資料の傾向をとらえ説明する」力が課題となっています。この力を育成するためには、情報を批判的に考察するプロセスを取り入れた活動が有効ではないかと考え、この主題を設定しました。

研究内容

統計的手法を用いて問題を解決するために、情報を明確化して分析し、推論を立てます。そして、他者からのフィードバックに基づいて行動決定する批判的思考のプロセスを教材化します。この授業実践をとおして、資料の傾向をとらえ説明する問題の正答率・通過率、説明・記述内容にどのような変容が表れるかを検証します。

須藤 崇研究員

(義務教育課 原籍校:鶴田町立鶴田中学校)



研究主題

中学校社会科歴史的分野において、社会認識を深める指導法の研究
- 江戸幕府と津軽藩の政治を同じ視点で学習し考察する活動をとおして -

研究に向けて

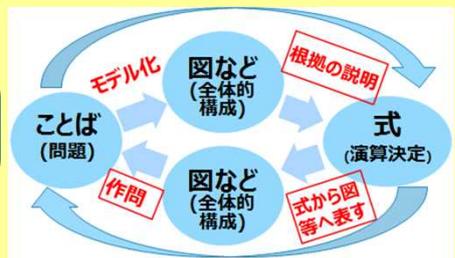
県の学習状況調査の結果から歴史的分野の思考・判断・表現に課題がみられます。社会的事象間の関連を複数の資料や立場から考察する活動に重点的に取り組むことで、社会認識が、事実認識から、関係認識、意味認識へと深まるようになるのではないかと考え、主題を設定しました。

研究内容

単元の発展学習として、身近な地域の教材「津軽藩の政治」を、江戸幕府と同じ視点から探究します。共通点から当時の日本の社会の特色を考え、相違点からは藩の独自性を考察します。社会的な見方や考え方を働かせた探究が、他の社会的事象との関係を読み解き、知識のまとめりとして歴史の意味をとらえる力につながっていくかを検証します。

松谷 雄一研究員

(義務教育課 原籍校:青森市立古川小学校)



研究主題

小学校第5学年小数のかけ算・わり算において
演算を適用する場面を理解し演算決定できる児童の育成
- 演算の意味理解サイクル(仮称)を使った活動をとおして -

研究に向けて

過去の学習状況調査の結果から、小数のかけ算・わり算の式をつくる(演算決定する)ことに課題があると言われていています。式をつくるためには、「問題場面の理解」が必要となります。その手立てとして、「演算の意味理解サイクル(仮称)」を使った活動が有効なのではないかと考え、主題を設定しました。

研究内容

「演算の意味理解サイクル(仮称)」では、問題文の数量関係を図などに表す、なぜその式になるかの根拠を説明する、式をよみ図などに表す、作問をするといった活動を行います。これらの活動を単元構成の中に計画的に組み込み、問題場面を理解できたか、式をつくらせて(演算決定させて)検証します。